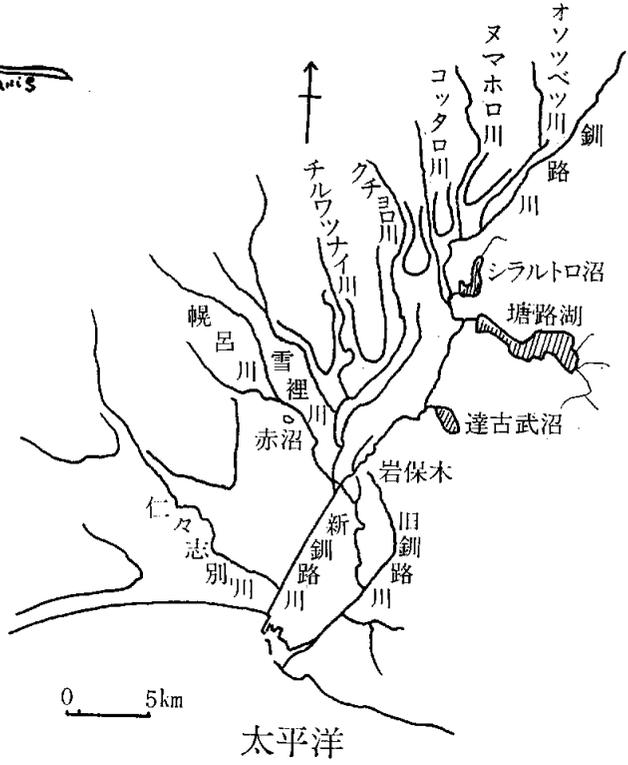




山代昭三

# 釧路湿原の魚類



釧路湿原水域図

## 一、まえがき

釧路湿原内の水域は、この広大な原野内を大きくゆったりと流れて行く釧路川を基に、これに注入する各支流河川、及び湿原の東側で、釧路川を南北に並ぶシラルトロ沼、塘路湖、達古武沼などの湖沼群、それに湿原中央部の大部分を占めるところの流れのほとんどない、いわゆる水溜りとなっている沼池などである。

このように湿原内の水域は、河川、湖沼及び沼池の三つに大別されるが、その高度は低く、標高一〇mを越えるところはほとんどない状態である。したがって河川においても水流は比較的ゆるく、中・下流部に位置づけられる。

この水域内に生息する魚類には、食用として産業上重要な種類や、遊漁の対象として多くの釣り人に親しまれているものなどを含み、分布が国内でもこの地方特有なもので、動物地理学上、特に貴重な種類もある。その生活史において、魚自身の生理的条件、産卵とか索餌とかの要因により、生活の全部を淡水中で経過するものや、すくなくとも、ある時期には海水域から淡水域に移動してくるものなど各種類が相当な区間を行動しかつ混棲している場合が多い。しかしながら水産業上重要な種類は別と

して、多くの魚類については、その分布、生態などいまだ十分に調査が行きとどいていないといえず、未知の分野が非常に多い現状にある。釧路市は、昭和四十六年より釧路湿原の総合調査を実施している。筆者も、その調査員の一人としてこの水域の魚類相の把握に努め、若干の調査観察を行ってきたので、従来の知見に過去の資料、地元住民からの聞き取りなども併用して、釧路湿原内魚類の生息状況の概略を記してみた次第である。

## 二、湖沼

湿原の東側には、北から南にシラルトロ沼、塘路湖、達古武沼と大型の湖沼が並列し、いずれも釧路川本流に排出している。これらの湖沼では内水面漁業が行われ、特に塘路湖はその産額が大きい。

シラルトロ沼の魚は塘路漁業組合の管理下にあるが、ここでの漁業はウグイの本流からの湖湖期と降下期をねらった刺網一〇〜二〇枚程度を使う小規模な漁業しか行われていない。この漁業の対象となるウグイは、主群が十月頃より十一月にかけて、釧路川本流よりこのシラルトロ沼に入り、水の下で越冬し、春四月頃、水が融け始めるとともに再び本流に下る全長三〇cm前後のものである。その他、ワカサギ、イトウ



釧路湿原魚類目録

円口綱 Cyclostomi

ヤツメウナギ目 Petromyzontida

ヤツメウナギ科 Petromyzontidae

スナヤツメ *Entosphenus reissneri* Dybowski

カワヤツメ *Entosphenus japonicus* (Martens)

硬骨魚綱 Osteichthyes

チヨウザメ目 Acipenserida

チヨウザメ科 Acipenseridae

チヨウザメ *Acipenser mikadoi* Hilgendorf

ニシン目 Clupeida

サケ科 Salmonidae

サケ *Oncorhynchus keta* (Walbaum)

カラフトマス *Oncorhynchus gorbuscha* (Walbaum)

サクラマス(ヤマベ) *Oncorhynchus masou* (Brevoort)

マスノスケ *Oncorhynchus tshawytscha* (Walbaum)

イトウ *Hucho perryi* (Brevoort)

ニジマス *Salmo gairdnerii irideus* (Gibbons)

アメマス(エソイワナ) *Salvelinus leucomaenis* (Pallas)

キュウリウオ科 Osmeridae

シンチャモ *Spirinchus lanceolatus* (Hikita)

ワカサギ *Hypomesus olidus* (Pallas)

チカ *Hypomesus japonicus* (Brevoort)

キュウリウオ *Osmerus dentex* (Steindachner)

コイ目 Cyprinida

コイ科 Cyprinidae

ウグイ *Tribolodon hakonensis* (Günther)

エゾウグイ *Tribolodon ezoe* Okada et Ikeda

ヤチウグイ *Moroco percnurus* (Pallas)

コイ *Cyprinus carpio* Linné

フナ *Carassius carassius* Temminck et Schlegel

ドジョウ科 Cobitidae

ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor)

フクドジョウ *Barbatula toni* (Dybowski)

ウナギ目 Anguillida

ウナギ科 Anguillidae

ウナギ *Anguilla japonica* Temminck et Schlegel

トゲウオ目 Gasterosteida

トゲウオ科 Gasterosteidae

エゾトミヨ *Pungitius tymensis* (Nikolsky)

イバラトミヨ *Pungitius pungitius* (Linné)

イトヨ *Gasterosteus aculeatus* (Linné)

スズキ目 Percida

クモハゼ科 Gobiidae

ウキゴリ *Chaenogobius urotaenia* (Hilgendorf)

ピリンゴ *Chaenogobius castanea* (O' Shaughnessy)

チチブ *Tridentiger obscurus* (Temminck et Schlegel)

カジカ目 Cottida

カジカ科 Cottidae

ハナカジカ *Cottus nozawae* Snyder

カレイ目 Pleuronectida

カレイ科 Pleuronectidae

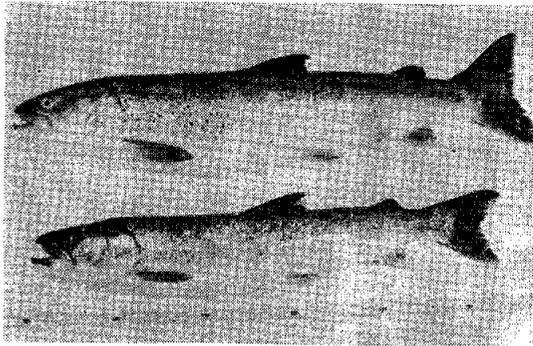
ヌマガレイ *Platichthys stellatus* (Palles)

で数回にわたり放流事業が試みられた。そして現在でもハエナワや小定置網などで、この漁獲がわずかながらはある。しかし最近では移殖放流が行われていないため、やがてその姿も消滅してしまおうであろう。コイおよびフナは、ワカサギとともに生産のうえで重要な種である。これらの種は比較的広温性であり、水温の変化にも強く耐えることができるため湖沼養殖の最適種と考えられ、従来よりそれぞれの生息はあつ

たが、稚魚の放流が行われている。特にフナにおいては、道南の大沼と同じようにゲンゴロウフナの移殖とその成長の良さが注目される。この湖でのフナの産卵期は七月八月、コイは七月九月で、この期間中ともに岸近くに集まってきて、ベカンベヤ、マコモのような水草に卵を産みつける。これらのほかに漁獲対象としてウグイがあり、年間一万kg以上の高い漁獲量がある。また雑魚として取扱われ、佃煮の原料

とされるものにハゼ類がある。このハゼの仲間では、ピリンゴが主で、それにウキゴリとチチブが入る。特異なものとして、この湖でドジョウが、混獲される。これは、水温が高い(夏季最高二七・二八℃)ことに起因するものらしい。かつて、ウナギの種苗が移殖された時に混入していたドジョウが、安定した水温のもとで繁殖したものであろう。この湖におけるドジョウの分布は特殊なものと考えてよい。

湖河性魚類としてサケ・マス類があるが、注入河川にてサクラマスの産卵が行われ、多数のヤマベの釣獲がある。春四〜五月、海より湖河したサクラマスが本流を経てこの湖に入り、秋になって注入河川を産卵場とするわけで、湖が親魚の産卵及び降海するギンケヤマベの通路となる。また春季、釧路川本流より降下してきたサケの幼魚の一部が塘路湖の排水口より湖に入って群泳している。これは、この時期



イトウ

湖内に餌料となる小型の浮游生物が多く出現するので、これを求めるための一時的な索餌移動かと思われる。しかし、これも水温の上昇とともに夏季までには再び本流に出て海に向かうようである。特殊な例に、ヌマガレイ(カワガレイ)とチョウザメがある。ヌマガレイはその数こそ少ないが、たまたま混獲されている。この魚は海岸で淡水の混合する汽水域にあたる釧路川の川口に常棲しているが、時にはかなり河川の上流にまで溯上することがあり、この塘路湖にも入り込んだものである。また、チョウザメは現在では全くその姿を見せない。

しかし、過去に極めてまれではあるが、これを捕獲した例がある。昭和十一年に二・一mのものが、刺網にかかったという。やはり釧路川を溯上して湖に入ったものであろう。漁獲の対象とはならないが、その生息量の大きいものにヤチウグイとイバラトミヨがある。ヤチウグイはウグイに似た魚で、湿原の湖沼に多く、せいぜい一〇cmほどにしかならず、その利用価値は全くない。トミヨの類は、イバラトミヨがすべてである。

達古武沼に生息する魚類はシラルトロ沼塘路湖とほぼ同様な種類で、温水性魚類が比較的多い。また、ここでの漁業は古くから達古武部落入他者によってコイやフナなどが漁獲されていたが、その生産量が塘路湖のように多くないため、漁業の規模もそれほど大きくない。

### 三、河川

釧路湿原を流れる河川の基をなすのは、釧路川である。その源を阿寒国立公園内、屈斜路湖に発し、流長一二九kmにも及ぶがそのほとんどは釧路湿原内を蛇行しながら流下し、途中多くの支流を合併している。

釧路湿原を流下する釧路川本流は、その河川の形態区分からみると、中流部と下流部とから構成される。すなわち、中流部

は湿原の北限より、新・旧釧路川の分岐点である岩保木付近までで、流れは湿原の東縁を蛇行し、河床も上流の砂礫から砂になり、やがて泥まじりの多いものに移って行く。

下流部は岩保木より河口まで、いわゆる新釧路川といわれるところで、湿原中央をゆっくり流下する。これは釧路川を岩保木から切り替えた直線放水路で、川幅は広く河床は泥炭である。また旧釧路川は、岩保木水門で完全にたち切られて釧路港に通ずる。湿原内、釧路川本流に生息する魚類には、その生活史の全部を淡水中で過すいわゆる純淡水性魚類と、淡水域と海水域との両域を生活の場とする習性をもつ、湖河・降下型魚類の二通りに大別することができ

る。純淡水性魚類として、スナヤツメ、エゾウグイ、コイ、フナ、フクドジョウ、ハナカジカ、イバラトミヨ、ウキゴリなどが生息し、特にエゾウグイ、フクドジョウ、ハナカジカなどが多い。

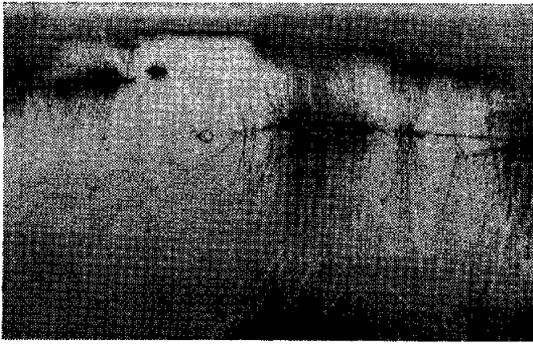
また、湖河・降下型魚類には淡水で卵からふ化し、しばらく淡水中で過したのち、海に降って成長し、また産卵のため戻ってくるサクラマス、カラフトマス、サケ、アママス、シシャモ、キヌウリウオ、チカ、ウグイ、トミヨなどのほかに、淡水域と海

水域あるいは汽水域との間を単に移動することのできるイトウやヌマガレイなどである。この湖河・降下型魚類のうちでサケ科及びワカサギ科のものは、水産業上非常に重要なものであり、特にサケやシシャモは人工採卵ふ化放流を行い、その漁業のための資源維持に努めている。分布生息量の多いものはウグイである。これら本流に生息する魚類の分布は、外阻の環境変化、自己の成長過程、産卵行動などの湖河降下の時期的移動や、捕獲のための人為的湖河阻止なども考慮に入れねばならない。

釧路川の代表的支川には、上よりオソツベツ川、ヌマホロ川、コッタロ川、久著呂川、雪裡川、幌呂川及び仁々志別川などがあり、それらがすべて釧路川本流の右岸に注入している。そして、この支川群は北部の丘陵台地より流れ出し、湿原内をきわめてゆるやかに蛇行しながら流下する。時には流路が複雑な乱流を呈し、沼池や池塘などを共有している。このことは、この地域が海拔五mにみたない低位置にあることからもうなづけることで、河川の増水期に小船で乗り込むと流路が迷路のごとくなり、いずれの水系に属するのか全く判断に苦しむことがままある。しかし支川の上・中流部は、台地の低地帯を流れ、釧路湿原の限界域を造っている。河床も砂礫の見られる

ところもあり、台地からの湧水が集まり、分枝流を形成しているところも多い。

これら各支川は河川の形態が上・中・下流と一連したものをもっているため、そこに棲む魚相も本州でいうイワナ域、ヤマベ域、ウグイ域というようにまではっきり区別するまでにはゆかないが、台地の間げきを流れる上・中流と広大な湿原内の下流域とでは常棲する魚類の分布が異っている。上・中流で特に多いのは、エゾウグイ、イバラトミヨ、ハナカジカでこれにピリンゴスナヤツメ、ヤマベ、アメマスなどがつづく。



沼池

下流域では本流生息魚に似るが、シシヤモは支流は溯河しない。しかし時期によりふ化場よりの降下サケ幼魚があり、アメマス、イトウも釣獲されているようであるが近年来、特にイトウの減少が目立つ。興味あることとして、トミヨ属の分布がある。筆者は過去、釧路川水系では、イバラトミヨのみでエゾトミヨは確認していなかったが、チルワツナイ川下流でこの生息の確認を得た。それも、これがチルワツナイ流域のみにイバラトミヨと混棲していることは注目すべきことであり、湿原内ではこの流域にしか生息しないのか、交流河川との関係も考えて再検討の余地が残されている。また湧水小河川は、冬季間水温が高く、その外圍環境が安定しているためか、トミヨ属、ウグイ、スナヤツメ、ハナカジカ、ピリンゴなどの純淡水性魚類や溯河性魚類でも越年するヤマベのような魚にとっては、冬季最も安住な生活場所となっている。

#### 四、沼池

沼池という語を水域の区分けのために使用することは適当であるか否かは、甚だ疑問であるが、ここでいう沼池とは一般にいわれている池・沼とは形態や規模において異なる場合もあり、湿原内の泥炭沼地といったところにもみられるもので、水流はほと

んどなく、いわゆる水溜りの存在で、増水期には各河川とも連絡するであろうところの陸水域を指し、河川・湖沼とは区別されるべきものと解釈されたい。

このようなところは各河川との交流が比較的少なくないためか、その水質が一般にいゆる谷地水で、酸素量、pHともに低い値を示す。したがって生息する魚類も、これらの環境要因に適応性の強いウグイ、ヤチウグイ、イバラトミヨなどに限定されるようである。移動性の強い魚類は増水期以外、全くみられない。

昭和四十七年七月、温根内近くの赤沼及びその付近の小さな水溜りから魚類の採集を行った結果、この地域の沼地にはヤチウグイ、イバラトミヨが優占し、これにハゼ類のピリンゴが加ったが、ハゼの場合、その生活条件からみて、この付近でもpHが、中性である赤沼のみに限られるものである。この赤沼のpHが中性であることは、沼池として特殊な例とも考えられ、溯河性魚類であるイトウ、アメマスの生息に関心をもちて臨んだがその確認ができなかった。

#### 五、むすび

湿原内の水域を、その形態、環境などより河川、湖沼および沼池の三つに大別し、それぞれの生息魚を記した。生息魚には、

純淡水性魚類と溯河・降下型魚類に分かれる。その生息分布には、水の流れが大きな要因の一つになっていると思われる。しかし、勾配が比較的ゆるやかな水域が多く、魚類の混棲する範囲は広い。湿原内水域の優占種はイバラトミヨとピリンゴである。水産業上重要な魚類も多く、湖沼増殖や人工ふ化事業が盛んである。

釧路湿原の魚類についての生息分布、習性などの調査は未だ充分といえない状態にあり、今回は一般的概要にとどまったが、近年来、急激な文化の発達に伴い、水資源の開発が進むにつれてその環境を刻々と変えつつある河川が少なくはなく、釧路湿原内水域もこれらの点で憂慮すべき事項がひん発している現状にあり、湖河・降下する魚類は勿論のこと、この水域内のすべてを減少、絶滅させ、繁殖を不可能にする危険性がある。

これは水産資源はもちろんのこと、自然保護の立場からも憂うべきことであり、われわれはこの水域に棲む魚類を二度と再現できない状態にすることなく、より以上に適切な保護、増殖をはかり、この水域を魚の豊庫としたいものである。

(北海道教育大学釧路分校)